活発な精神的活動に対する意志力の暗黙理論尺度 (ITW-M) 日本語版の作成

○櫻井良祐^{1,2}・渡辺匠¹

(¹北海道教育大学・²東京大学)

キーワード：意志力、自己制御、しろうと理論

Development of a Japanese Version of the Implicit Theories About Willpower for Strenuous Mental Activities Scale (ITW-M)

Ryosuke SAKURAI^{1,2} and Takumi WATANABE¹

(¹Hokkaido University of Education, ²University of Tokyo)

Key Words: Willpower, Self-Control, Lay Theory

目 的

Implicit Theories About Willpower for Strenuous Mental Activities Scale (ITW-M)は、意志力の性質（有限—無限の一次元）に関する暗黙理論を測定する尺度である（Job et al., 2010; Napolitano & Job, 2018）。先行研究では、意志力が有限であるという暗黙理論を持つ学生ほど、自己制御の負担が大きい（e.g., 履修科目数が多い）状況において学業成績が悪くなるということが確認されている（Job et al., 2015）。この種の現象はセルフコントロール等の関連概念では説明されないことから、人々の自己制御過程を解明する上で意志力の暗黙理論の個人差を測定する意義は大きいと考える。そこで本研究は2つの質問紙調査を通じて日本語版 ITW-M の作成を試みた。

研究 1

研究 1 の目的は、日本語版 ITW-M の因子構造と収束的・弁別的妥当性を検証することである。

方法 大学 2～4 生を対象とした質問紙調査を実施した。有効回答者数は 2,484 名（男性 1,148 名、女性 1,446 名）であった。原著者から許可を得た上で、日本語版 ITW-M6 項目を再翻訳法により作成した。教示文は、「以下の質問は意志力に関するあなたの考えを調べるために作られています。意志力とは、あなたが誘惑に抵抗したり、あなたの意図をつらぬいたり、活発な精神的活動を続けるために用いるものです。それぞれの文章について、どの程度賛成あるいは反対するかをお答えください」とした。回答は、他の項目と回答の方向を一致させるために原尺度を逆転させ「1：強く反対する、2：やや反対する、3：少し反対する、4：少し賛成する、5：やや賛成する、6：強く賛成する」の 6 件法で尋ねた。Napolitano & Job (2018) に準じ、収束的妥当性の検証のため、セルフコントロール（13 項目）と人生満足度（5 項目）を測定し、弁別的妥当性の検証のため、増大的知能観（6 項目）を測定した。これらの項目は全て 5 件法で測定した。

結果・考察 日本語版 ITW-M6 項目について探索的因子分析をおこなった。結果、固有値の減衰状況（2.12, 1.78, 0.80）から 2 因子解を採用し、第一因子（ $M = 4.34, SD = 0.82, \alpha = .72$ ）を「有限理論」、第二因子（ $M = 3.34, SD = 0.84, \alpha = .71$ ）を「無限理論」と名づけた。相関分析の結果、有限理論は、セルフコントロール（ $r = -.13$ ）と負の相関、増大的知能観（ $r = .09$ ）と正の相関を示した。他方、無限理論は、セルフコントロール（ $r = .20$ ）、人生満足度（ $r = .24$ ）、増大的知能観（ $r = .10$ ）ともに正の相関を示した。先行研究との比較のため、全 6 項目を「無限理論」を表すよう逆転・平均した得点（ $M = 3.04, SD = 0.61, \alpha = .63$ ）との相関関係を検証したところ、セルフコントロール（ $r = .22$ ）と人生満足度（ $r = .19$ ）との間に正の相関を示した一方で、増大的知能観（ $r = .01$ ）とは有意な相関を示さなかった。したがって、原尺度と異なり 2 因子構造が確認されたものの、日本語版 ITW-M は一定の妥当性を示したと判断した。

研究 2

研究 2 の目的は、Job et al. (2015) の概念的追試を通じて、日本語版 ITW-M の収束的妥当性を検証することである。

方法 大学 1 年生を対象とした質問紙調査を実施した。有効回答者数は 1,177 名（男性 565 名、女性 612 名）であった。研究 1 と同様、日本語版 ITW-M とセルフコントロールを測定した。これらの回答を、前期・後期の履修科目数/GPA とマッチングして分析をおこなった。

結果・考察 Job et al. (2015) を参考に、後期 GPA を従属変数とした階層的重回帰分析をおこなった。具体的には、STEP1 で前期 GPA を独立変数とし、STEP2 で後期履修科目数・有限理論・無限理論・セルフコントロールを追加し、STEP3 で後期履修科目数×有限理論、後期履修科目数×無限理論、後期履修科目数×セルフコントロールを追加した分析をおこなった。結果、交互作用項の中で後期履修科目数×有限理論のみが有意となった（ $b = -.07, t = -3.20, p = .001$ ）。単純傾斜分析の結果、後期履修科目数が多い（+1SD）学生は、有限理論を強く持つほど後期 GPA が低いことがわかった（ $b = -.11, t = -3.46, p = .001$ ）。また、「後期履修科目数と前期履修科目数の差」を調整変数として同様の階層的重回帰分析をおこなったところ、後期に履修科目数が増加した（+1SD）学生は、有限理論を強く持つほど後期 GPA が低いことがわかった（ $b = -.10, t = -3.20, p = .001$ ）。すなわち、全体として Job et al. (2015) と整合する結果が得られた。以上より、日本語版 ITW-M は意志力の暗黙理論の個人差を測定する尺度として一定の妥当性を持つと結論づけられるだろう。

表. 日本語版 ITW-M の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	項目	有限理論	無限理論
2	活発な精神的活動の後、あなたのエネルギーは消耗され、それがふたたび補給されるために休まなければならない	.901	.022
1	活発な精神的活動はあなたの資源を使い果たし、それは後で補給する必要がある（例えば、休憩をとったり、何もしなかったり、テレビをみたり、スナック菓子を食べることなどを通じて）	.793	.026
5	あなたが活発な精神的活動を終えたとき、精神的なエネルギーをふたたび回復しなければならないので、すぐに同じ集中力で別の活動を始めることはできない	.402	-.070
3	あなたが活発な精神的活動を要する課題に取り組んでいるとき、エネルギーを得たように感じ、すぐに労力のかかる別の活動を始めることができる	-.134	.699
4	あなたの精神的なスタミナはひとりでに補給される。活発な精神的活動の発揮の後でさえ、それをもっとやり続けることができる	.068	.690
6	活発な精神的活動の後、あなたはさらに困難な活動に向けてエネルギーを得たように感じる	.030	.640
	因子間相関	-.097	